［論 文］

日本語のアクセントと韓国語のアクセント

新　谷　多　枝

1. はじめに

韓国語は、日本語と語順がほぼ同じであり、「て」「に」「を」「は」に対応する助詞もあり、日本人にとっては学びやすい言語である。

韓国語の文字であるハングルも、一見、○や△や□の集まりのような取っ付きにくい印象を与えるが、実際は、ローマ字のように子音と母音で構成された文字であり、学習一日目から自分の名前をハングルで書くことが出来て楽しい。

全てのハングル文字を一通り覚えて、ゆっくりでも韓国語の文章を一人で読めるようになるのに、一ヶ月もあれば十分である。最近は、ほとんどのテキストにCDが付いているので、ネイティブの発音も聞くことができ、外国語学習とはこんなに楽しいものだったのかと、一昔前の英語学習との違いに驚く。

しかし、韓国語の学習が進み、韓作文をして発表したり、CD付きでない副読本を読み始めると、なんとなく違和感が出てくる。それは、お手本のCDがないと、自分の韓国語の抑揚が、まさしく日本語の抑揚になってしまうからである。

では、韓国語らしい抑揚にするには、どうすればよいのかと韓国語入門のテキストを読み直しても、どこにも書いていない。音感の良い学習者であれば、付属のCDを真似している間に、身に付いてしまうのであろう。しかし、

そのような才能に恵まれていない筆者には、CDの音源だけでなく、目に見える「楽譜」が必要なのである。

本稿では、韓国語と日本語のアクセント──単語における音の高低に関する決まり──を概観し、その違いを認識した上で、日本人が韓国語を自然な抑揚で話せる手がかりを考察する。尚、本稿で扱うアクセントは、韓国語はソウル方言を、日本語は東京方言を対象としている。

2. 韓国語のアクセント

本章では、長渡（2009）に従って、ソウル方言の抑揚ルールを概観する。長渡（2009）によると、韓国語は、日本語と同様、高低アクセント（pitch accent）である。しかし、ソウル方言は、東京方言とは違って、単語ごとに決まったアクセントは無いので、下の図１が示すように、無アクセントに分類される。図１の白地が無アクセント地帯である（早川　1999: 30）。[1)]

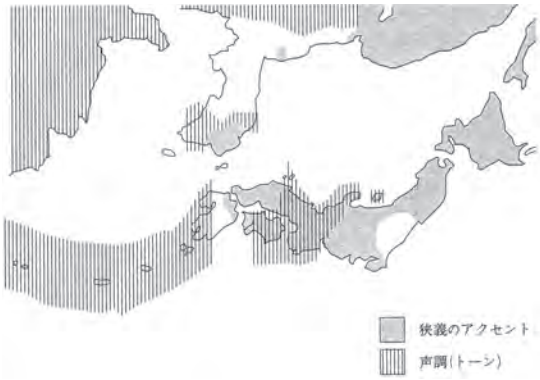

図1　日本およびその周辺のアクセント分布

ただし、無アクセントであっても、語句や文をまとめる抑揚はある。長渡（2009）は、ソウル方言の単語の抑揚ルールとして、「低中」と「高高」の２種類を提示している。その使い分けの決め手は、語頭の音節が平音・鼻音な

どで始まるか、激音・濃音・摩擦音で始まるかによる。以下の表１に、長渡（2009: 28, 34）の提案する平音・鼻音などと激音・濃音・摩擦音の区分を示す。（表１は、本稿に合わせて表示を一部修正してある。）

表　1

単語の最初		ルール
平音 鼻音など	ㄱ ㄷ ㅈ ㅂ ㅁ ㄴ ㅇ ㄹ	⇒　「低中」
激音 濃音 摩擦音	ㅋ ㅌ ㅊ ㅍ ㄲ ㄸ ㅉ ㅃ ㅅ ㅆ ㅎ	⇒　「高高」

表１で注意すべきは、一般的に、ㅆは濃音の１つであるが、ここでは摩擦音に分類され、濃音とは分けて考えられている。これから先に言及する平音・鼻音などと激音・濃音・摩擦音の区分は表１に準ずる。（本稿第２章の韓国語の例文は、長渡（2009）から表示の仕方を一部修正して引用している。）

2. 1.「低中」のピッチ・パターン

以下の(1)－(3)に示すように、語頭の音節が平音で始まる場合、ソウル方言では「低中」のピッチ・パターンになる。「低中」とは、音程を「低」「中」「高」の３段階に分けたとき、１文字目を「低」で、２文字目を「中」で発音することである。

(1)a. 高　　b.　　c.
　　中　　기　　두　　리
　　低　　고　　구　　다
　　（肉）　　（靴）　　（脚・橋）

(2)a. 高　　b.　　c.
中　라지　　부기　　서관
低　도　　거　　도
(キキョウ)　　(カメ)　　(図書館)

(3)a. 高　　b.　　c.
中　라지가　　부기가　　서관이
低　도　　거　　도
(キキョウが)　　(カメが)　　(図書館が)

上例(1)は2音節から成る名詞であるが、語頭音節が平音で始まるため、「低中」パターンになる。(2)は3音節の名詞である。これらも語頭音節が平音で始まるため、「低中」パターンであり、一度「中」に上がった音程はそのままの高さを保つ。(3)は(2)の名詞に助詞を付けて4音節にしたものであるが、助詞を付けても一度「中」に上がった音程はそのままである。

次の(4)は、もう少し語句を加えて、一文にした例である。

(4)　高
中　서관에　림이　어
低　도　그　있　요.
(図書館に　絵が　あります)

(4)から分かることは、最初の語句も二番目の語句も平音で始まっているため、それぞれ「低中」「低中」パターンである。文末の動詞句も「低中」パターンであるが、平叙文のため音程を下げて終わる。

次の(5)のように、文末の動詞句が平音で始まり、2音節しかない場合には、「低」で始まり「低」で終わるため、結果的に「低低」となる。

(5)　高
　　中　　게
　　低　　이　　디다.
　　（これは　Dだ）

急いで補足しておくと、次の(6)の밥のように1文字だけのときは、平音であっても「低」ではなく、「中」で発音される。文末の動詞句は「低中」パターンであるが、疑問文のため「高」に上げて終わる。

(6)　高　　요？
　　中　　밥　　었어
　　低　　먹
　　（ご飯　食べましたか？）

2. 2.「高高」のピッチ・パターン

以下の(7)－(9)が示すように、語頭の音節が激音・濃音・摩擦音で始まるとき、ソウル方言では「高」で始まり、語末まで「高」を保つ。長渡（2009: 33）によると、この場合の「高」は日本人にはかなり高い音程であり、「ドレミファソラシド」の高いドに相当するという。

(7)a. 高　　칼이　　b.　딸기　　c.　혼차
　　中
　　低
　　（ナイフが）　（イチゴ）　（紅茶）

(8)a. 高　　편의점　　b.　코끼리　　c.　딸기가
　　中
　　低
　　（コンビニ）　（ゾウ）　（イチゴが）

(9)a. 高　　편의점이　　b.　코끼리가
中
低
(コンビニが)　　(ゾウが)

上記(7)は2音節から成る語句であるが、最初の音節がそれぞれ激音・濃音・摩擦音で始まっているため、「高高」パターンになる。(8)は3音節の語句であるが、激音または濃音で始まるため、「高」で始まり、その高さを保ち続ける。(9)のように助詞を付けて4音節になっても、「高高」パターンのままである。

次の(10)のように、すべての語句が濃音で始まる場合、「高高」パターンが続き、文末の動詞句のみ、平叙文の場合は下げて終わる。(11)のように疑問文であれば、最後まで「高」を保ち続ける。((10)の音程は、長渡（2009）に明示されていないため、筆者の判断である。)

(10) 高　　딸기가　　땅에　　딸어
中　　졌
低　　다.
(イチゴが　　地面に　　落ちた)

(11) 高　　혼차는　　편의점에서　　팔아요？
中
低
(紅茶は　　コンビニで　　売っていますか？)

次の(12)(13)(14)は、平音で始まる語句と激音・摩擦音で始まる語句が一文中に混じっている例である。平音の音節で始まる語句は「低中」パターンであり、激音・摩擦音の音節で始まる語句は「高高」パターンであることが分かる。

(12) 高　　콜라
中　　세
低　　주　요.
(コーラ　　下さい)

(13) 高　　차가
中　　에　　어
低　　집　　있　요.
(家に　　車が　　あります)

(14) 高　　싶
中　　천에　　고　　어
低　　온　　가　　요.
(温泉に　　行き　　たいです)

これまでの例を見る限り、ソウル方言は語句の1音節目が平音・鼻音などで始まるか、激音・濃音・摩擦音で始まるかを見極めれば、その語句を「低中」パターンで読むか、「高高」パターンで読むかが区別でき、外国人学習者にはとても分かりやすい。しかし、分かりやすいからといって、その規則通りに発音できるかというと、外国語はそれほど簡単ではない。なぜなら、そこには母語の干渉があるからである。次章では、日本語のアクセントを概観する。

3. 日本語のアクセント

日本語でアクセントが有るとは、単語のどこかで音程が「高」から「低」へ下がる場所があることを意味し、アクセントは「低」に下がる前の「高」の位置に有る。ここで留意しておいてほしいが、東京方言の「高」「低」とソウル方言の「高」「低」は同じ高さを示しているのではない。各言語の中での相対

的な高さを示しているにすぎない。

3. 1. アクセントの有無

東京方言は、アクセントの無い「平板式」とアクセントの有る「起伏式」の二つに分かれる。例えば、(15)はアクセントの無い「平板式」の名詞であり、(16)はアクセントの有る「起伏式」の名詞である。

(15)a. いふさ（財布）　b. こはまよ（横浜）　c. んぶんやし（新聞屋）

(16)a. **あ**きた（秋田）　b. **み**のもの（飲み物）　c. ん**り**しがく（心理学）

(15)の平板式は、1拍目が「低」で始まり、2拍目から「高」が続く。これらの名詞の後に助詞が続いても、ピッチは高く保たれたままである。(16)の起伏式は、単語のどこかにアクセントがあり、その直後でピッチの落下がある。アクセントは太字で示した位置にある。これらの名詞の後に助詞が続いても、ピッチは低いままである。東京方言では、一度落ちたピッチは、同じ語中では再び上がることは無い（cf. NHK放送文化研究所 1998）。

日本語の平板式のパターンは、韓国語の平音・鼻音などで始まる「低中」パターンに似ているため、あまり大きな母語干渉とはならない。しかし、起伏式のパターンは韓国語に無いため、どこにアクセントが置かれるのかを、次節で詳しく見てみよう。

3. 2. 起伏式のアクセントの位置

(17)－(19)に起伏式アクセントの名詞を、もう少し挙げてみる。ここでは、高いピッチの部分を　　で示し、アクセントの位置を太字で示す。

(17)a. いのち（命）　b. とちぎ（栃木）　c. みどり（緑）

(18)a. あざらし（海豹）　b. いばらぎ（茨城）　c. きよもり（清盛）

(19)a. あきはばら（秋葉原）　b. えいがかん（映画館）　c. いなりずし（稲荷寿司）

アクセントの位置を単語の前から数えると、(17)は1拍目に、(18)は2拍目に、(19)は3拍目にあって、規則性が無いようにみえる。しかし、窪薗（2006）に従って、これを並べかえて、後ろから数えてみると、見事に後ろから3拍目にアクセントがある。

(20)
いのち
とちぎ
みどり
あざらし
いばらぎ
きよもり
あきはばら
えいがかん
いなりずし

上記の言語事実から、窪薗（2006: 13）は「語末から三つ目のモーラにアクセントを置く」と一般化した。東京方言では、起伏式であれば語末から三つ目のモーラ（拍）にアクセントを持つのもが多い。しかし、次の(21)は、語末から四つ目のモーラにアクセントがあり、例外になってしまう。

(21)a.　か　　b.　け　　c.　ちゅ
　　んぬし　　っしん　　ーごく
　　(神主)　　(決心)　　(中国)
d.　さ　　e.　け
　　いたま　　いざい
　　(埼玉)　　(経済)

(21)の単語をよく見ると、語末から三つ目のモーラに特殊拍と呼ばれる撥音（ん)、促音（っ）長音（ー)、二重母音の2音目（[ai][ei]等の[i]）が入っている。これら特殊拍は、1拍には数えられるが、アクセントを担うほどの自立性はない。また音節としても自立できないため、直前の自立拍に付属している。(「ちゃ」「ちゅ」「ちょ」などの拗音「ゃ、ゅ、ょ」を含むものは二文字で1モーラであり、1音節を成す。)

窪薗（2006: 20）は、(21)も説明可能なように、(22)のような起伏式アクセント規則を最終的に提案している。[2)]

(22)　起伏式アクセント規則
　　語末から数えて三つ目のモーラを含む音節にアクセントが置かれる。

(21)の名詞が(22)の起伏式アクセント規則で説明できるか見てみよう。モーラをMで示し、音節の区切りを┆で示すと(23)のようになる。

(23)a.　か　　b.　け　　c.　ちゅ
　　ん ぬ し　　っ しん　　ー ご く
　　MM┆M┆M　　MM┆MM　　M M┆M┆M
d.　さ　　e.　け
　　い た ま　　い ざ い
　　MM┆M┆M　　MM┆M┆M

(23a)は、後ろから三つ目のモーラ「ん」が特殊拍のため、アクセントが置けない。そのため、この「ん」を含む音節内の自立拍である「か」にアクセントが置かれる。(23b-e)も同じく、後ろから三つ目のモーラが特殊拍のため、その前の自立拍にアクセントが置かれる。

(22)の規則は、日本語の名詞だけではなく、特殊拍を含むことが多い外来語（カタカナ語）のアクセントの位置も予測できることが、(24)で明らかである。

(24)a.　カ　　b.　シ　　c.　サ
メ ラ　　ワ　ン トン　　ッ カー
M¦M¦M　　M¦MM¦MM　　MM¦MM

(24a)は、後ろから三つ目のモーラ「カ」が自立拍なので、そこにアクセントが置かれる。しかし(24b)では、後ろから三つ目のモーラが特殊拍「ン」であり、アクセントを担えないため、この「ン」を含む音節内の自立拍である「シ」にアクセントが置かれる。(24c)も、後ろから三つ目が特殊拍「ッ」であるため、これを含む音節内の自立拍の「サ」にアクセントが置かれる。

3. 3. 語頭のアクセント

東京方言のアクセントでもう1つ特徴的なのは、語頭が「高低」か「低高」のどちらかのパターンになることである。つまり、語頭の1拍目と2拍目が同じ高さで連続することはない（cf. NHK放送文化研究所 1998）。

例えば、(25)は平板式の名詞であり、(26)は起伏式の名詞であるが、どの名詞も1拍目が「低」であり、2拍目が「高」になっている。

(25)a.　つ　　b.　ざり　　c.　ろしま
く　　か　　ひ
（靴）　　（飾り）　　（広島）

(26)a.　　お　　b.　　まざ　　c.　　ろとみ
　　あ　もり　　や　　くら　　む　　さき
　　(青森)　　(山桜)　　(室戸岬)

一方、次の(27)は1拍目が「高」であり、2拍目が「低」の名詞である。言うまでも無いが、2拍目でピッチの落下があるので、(27)は起伏式の名詞である。

(27)a.　ね　　b.　つ　　c.　け
　　こ　　ばき　　んどー
　　(猫)　　(椿)　　(剣道)

4. 日本語の干渉

第3章で、日本語にはアクセントの無い「平板式」とアクセントの有る「起伏式」の2型のピッチパターンがあることを見てきた。この2型のピッチパターンを、2拍から5拍の単語でまとめると、表2のようになる。●は特殊拍であることを示す。[3)]

表　2

日本語	平板式	起伏式
2拍	○ ○	○ ○
3拍	○○ ○	○ ○○
4拍	○○○ ○	○　又は　○ ○　○○　●○○
5拍	○○○○ ○	○○　又は　○ ○　○○　○　●○○

第2章で、韓国語には語頭が平音・鼻音などで始まる「低中」と激音・濃音・摩擦音で始まる「高高」の2型のピッチパターンがあることを見てきた。韓国語と日本語にそれぞれ2型のピッチパターンがあることを基礎にして、日本人が韓国語の抑揚を習得する時の注意点をまとめると、表3と表4のようになる。

表　3

韓国語の語頭音	平音・鼻音など　⇒　「低中」パターン		
日本語の干渉	なし	平板式	起伏式
2拍	○ ○	○ ○	○ ○ 注：高く始めない
3拍	○○ ○	○○ ○	○ ○○ 注：高く始めない
4拍	○○○ ○	○○○ ○	○　○ ○　○○　●○○ 注：語末を下げない 注：高く始めない
5拍	○○○○ ○	○○○○ ○	○○　○ ○　○○　○　●○○ 注：語末を下げない

上の表3から分かることは、韓国語の語句を読むときに、平音・鼻音などで始まる単語の場合は、日本語の平板式で読んでも、日本語の干渉のない正しい韓国語の「低中」パターンと同じになり、なんの問題もない。

しかし、アクセントの有る起伏式の読み方を持ち込んで、韓国語をカタカナ式に読んでしまうと、2拍（音節）や3拍（音節）の短い単語は、高く始まってしまう。長渡（2009: 40）に、それを示す事例が載っているので、(28)

－(29)に引用する。

(28)

치　　세	⇒	×	キ　　チュ
김　　주　요.			ムチ　　セヨ
(キムチ　下さい)			

(29)

니！	⇒	×	オ
언			ンニ
(お姉ちゃん！)			

(28)の김치は平音で始まっているので、「低中」パターンで読むべきであるが、日本人はカタカナ式に「キムチ」と3拍にして、語末から3拍目にアクセントの有る「中低」で読む傾向があることを示している。(29) の언니!も「低中」パターンで呼びかけるべきであるが、「オンニ」と3拍にして、語末から3拍目にアクセントの有る「中低」で読んでしまう。

表　4

韓国語の語頭音	激音・濃音・摩擦音　⇒　「高高」パターン		
日本語の干渉	なし	平板式	起伏式
2拍	○○	○ ○ 注：低く始めない	○ ○ 注：語末を下げない
3拍	○○○	○○ ○ 注：低く始めない	○ ○○ 注：語末を下げない

4拍	○○○○	○○○ ○ 注：低く始めない	○　　○ ○　○○　　●○○ 注：低く始めない 注：語末を下げない
5拍	○○○○○	○○○○ ○ 注：低く始めない	○○　　○ ○　○○　○　●○○ 注：低く始めない 注：語末を下げない

上の表4から分かることは、激音・濃音・摩擦音で始まる韓国語の単語を、日本語の平音式で読むと、語頭が「低」で始まってしまうので、「高」で始めるよう注意が必要である。語末は、平板式で読んでも高いままなので、問題はない。

一方、日本語の起伏式で読むと、2拍（音節）や3拍（音節）の単語は、語頭の1拍目は「高」で始まるので問題ないが、2拍目から「低」に下げてしまうので、高さを保つよう注意が必要である。4拍（音節）以上の単語では、起伏式で読むと、語頭の1拍目が「低」で始まることに加え、語末の2拍または3拍が「低」に下がってしまう。語頭から語末まで「高高」を保ち続ける必要がある。このようなピッチパターンは日本語には無いので、意識的な注意と音読練習を何度もする必要がある。

長渡（2009:40）に、次のような日本人の間違ったピッチパターンの例が挙げられている。

(30)

콜라			
세	⇒ ×	コ	チュ
주　요.		ッラ	セヨ
（コーラ　下さい）			

(30)の콜라は激音で始まっているので、「高高」パターンにすべきである。

しかし、日本人は「コッラ」と3拍で読む傾向があり、語末から3拍目である語頭にアクセントを置いてしまう。語頭を高く始めるのは問題ないが、2拍目でピッチを下げてしまうので、注意が必要である。一方、動詞の주세요は平音で始まるため、「低中」パターンにすべきであるが、3拍のため語頭にアクセントを置いてしまい、2拍目からピッチを下げた読みになってしまう。

5. おわりに

日本人が韓国語を自然な抑揚で話すには、語頭の音節が平音・鼻音などで始まるか、激音・濃音・摩擦音で始まるかの見極めが必要であった。平音・鼻音などでは「低中」のピッチパターンであり、激音・濃音・摩擦音では「高高」のピッチパターンであった。これは実に単純明快であるが、母語の干渉のため、実行は容易ではない。

日本語母語（東京方言）話者の場合は、アクセントを置いて、単語のどこかでピッチを下げてしまう傾向がある。第一に、単語が2拍（音節）や3拍（音節）の場合、語頭の調音法にかかわらず、最初の1拍目にアクセントを置く傾向が見られる。その為、1拍目を高く始めて、2拍目のピッチを下げてしまう。韓国語では、単語を「中低」や「高中」で始めるピッチパターンは無いので、注意が必要である。第二に、単語が4拍（音節）以上の場合、後ろから3拍目または4拍目にアクセントを置き、それ以降のピッチを下げてしまう傾向がある。韓国語では、文末でない限り、語末でピッチを下げることはないので、高く保ち続けるよう意識的な努力が必要である。これら二点に注意して、ＣＤなどを手本に何度も音読練習をする。しかし、いくら練習をしても、思わぬ癖が残るものである。自分の音声を録音して、自分の抑揚とネイティブの抑揚を聞き比べるという、客観的作業が必須である。

注

1）この図から、韓国の北部地域だけでなく、日本の東北地方南部から北関東までの地域も無アクセントであることが分かる。筆者が韓国語を習い始めた頃、韓国ドラマを見ていて、韓国語の抑揚は東北弁に似ているとの印象を持った

が、それが証明されたようで嬉しい。興味深いことに、ソウル出身の金裕鴻氏も、茨城県の女性の日本語を聞いて、韓国語の抑揚に似ていると感じたと述べている（cf.茨木＆金　2004:165, 九州方言研究会 2009:159）。

2）この規則に合わないアクセント型もあるが、その占める割合は、3モーラ（拍）名詞の場合で6％と極めて少ないので、本稿では考察の対照としない（cf.窪薗　2006:15）。

3）東京方言では、平板式の名詞と起伏式の名詞の数の割合は半々である。しかし、どのような語が平板式になり、どのような語が起伏式になるかは、まだ完全には解明されていない（cf.窪薗　2006:10-11, 62-63）。

参考文献

茨木のり子＆金裕鴻（2004）『言葉が通じてこそ、友だちになれる』筑摩書房
NHK放送文化研究所・編（1998）『新版　日本語発音アクセント辞典』NHK出版
九州方言研究会・編（2009）『これが九州方言の底力！』大修館書店
窪園晴夫（2006）『アクセントの法則』岩波書店
長渡陽一（2009）『韓国語の発音と抑揚トレーニング』アルク
早川輝洋（1999）『音調のタイポロジー』大修館書店